

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
庄内二都
建物探訪
庄内憧憬
高山由紀子 脚本家

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

3 2015 March/April
TAKE FREE
NO.28



Cradle 3

美しくつかしい、日本をのせて。
【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

2015 March/April
平成27年3月1日発行(隔月奇数月発行)第5巻4号(通巻28号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-16 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0235(64)0888
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市茶田2-59-3 [コア・コミュニケーション] 電話0234(4)0012

FIDEA GROUP



遊佐町 / 鳥海山と中山堤の桜並木

残雪遠く 間近にせまる春の色

 庄内銀行

雅で美しく、奥深い精神世界を感じる庄内

”…のう”という美しい言葉の響きは

この地域が抱き続けた歴史と文化が育んだのだろう。

不思議な縁に導かれて

高山由紀子

鶴岡はなんと雅で美しいところだろう。「致道博物館」に「松ヶ岡」、東京生まれの私だけれど、ふるさとと呼んでみたい。そんな気のするところである。学生時代に花柳寿佳津先生に誘われて、初めて訪ねたのは「天神祭」の時だった。長襦袢に編み笠で顔を隠し街を歩く。ところどころで出会った人と言葉を交わすと、”…のう”と語尾のイントネーションがたまらない響きとなって心に触れたことを今もはつきりと思い出す。

それから十年近くが経ち、私は森敦先生の名作『月山』と出会い、不思議ともいえる縁を持つことになった。

村野鐵太郎監督の映画『月山』はまだデビューしたばかりの私の二本目のシナリオであった。原作は雪に閉ざされた七五三掛の寺にひと冬を過ごす青年

の物語である。あまりに哲学的な世界にかなり苦しんだ作品だったけれど、撮影の前年のロケハンで目に焼きついた雪の白さが神秘の世界に私を導いてくれた。そして注連寺で初めて相対した即身仏に眼をみはった。それは類まれな出羽三山信仰への入り口でもあった。奥深い精神世界を肌にした瞬間であり、そしてそれは庄内という地域がじっと抱き続けた歴史を思い知らされた瞬間だったかもしれない。”…のう”というこの美しい響きはこの文化が育んだのだろうか。

映画『月山』のセリフになんとか庄内言葉の美しさを出せたらと苦心した。方言をそのまま使えば観客は理解できないだろうし、標準語では美は匂わない。勝手な文法表を作って、造語したことを思い出す。

昨年の夏、再び鶴岡を訪ねる機会を持った。シリーズで書いている時代小説『吉原代筆人雪乃』に羽黒信仰の修験道を書いてみたかったのだ。『月山』で出会って以来、興味を持ち続けたテーマのひとつだった。

NHKにいらした竹野恵子さんは、庄内での撮影中にお会いしたことがきっかけで、大の親友である。

この日も、彼女に運転してもらって湯殿山に出かけた。懐かしい仙人沢から御神体を巡りながら、脚本家として歩き出したあの頃の大切な思い出と重なっていく。そして今また、ふたたび幽玄の深山に立てたことは、たとえようもない嬉しい旅となったのだった。



鶴岡市羽黒町松ヶ岡から望む、早春の月山

たかやま・ゆきこ／脚本家。1975年「メカゴジラの逆襲」でデビュー。映画『月山』『遠野物語』最新作に「真幸くあらば」等多数。1997年監督デビュー。「風のかたみ」「娘道成寺」「蛇炎の恋」(フジテレビDCインディペンデント映画祭最優秀賞)、「源氏物語」千年の謎」では原作者となる。以後作家活動に入る。著書に「吉原代筆人雪乃」シリーズ。父は日本画家の高山辰雄。

特集 | Special Edition

庄内 建物探訪

町並みは、くらしの背景を映し出します。
その景観をつくる建物は、人や歴史、自然、匂いや色と、
町のさまざまな要素をつないで生まれ、育った佇まいをしています。
その町が過ごしてきた時間を、建物からたどってみたいと
酒田、鶴岡、二つの都のまちなかを訪ねました。

〈取材協力〉
東北公益文科大学、本立信成株式会社、
酒田まちづくり開発株式会社、公益財団法人 致道博物館

〈写真提供〉
P10(下・上2枚)＝温井亨(東北公益文科大学)
P6～7・P12＝致道博物館 P13(上)＝財団法人 克念社
P13(下)＝高谷研究室(撮影／高橋政知) P14(下右)＝新茶屋
P15＝絵倶楽部(撮影／斎藤政広)



旧西田川郡役所
致道博物館にある旧西田川郡役所は明治14
(1881)年の建造。棟梁は明治の名匠高橋兼吉。
両翼平屋部分の屋根が入母屋造りで、2階と
塔屋はヨーロッパの古典様式を模している。

湊酒田の面影を映す 商業交易都市の文化と建築

水運による栄華の名残 湊都、商都としての酒田

「西の堺、東の酒田」と謳われた酒田。湊隆盛の江戸時代、町は諸国の物資と文化が行き交い、商人たちが台頭しました。その栄華の歴史は、今も町の景色に面影を残しています。「昔から酒田は幾多の火災に見舞われて、明治以前の建物はほとんど焼失してしまいました。それでも奇跡的に罹災を免れた建物を中心に残っています」と案内してくださったのは、NPO法人酒田港女みなと会議理事長で建築士の小山恵子さんです。

「本間家旧本邸」は、日本一の大地主として名を馳せた豪商、本間家のかつての邸宅。明和5年に、三代光丘が幕府の巡見使宿として新築、荘内藩主に献上し、後に拝領して昭和20年春まで住まいとしていました。「この建物は武家屋敷と商家造りが一体となった、非常に特殊な構造です」。旗本2千石格の長屋門を構えた書院造りの

武家屋敷は、美しい柵目のヒノキやケヤキなどが使われ、柱や天井はすべて面取りがされるなど細部にまで贅を尽くしてあります。一方で家族が暮らしていた商家造りをのぞくと、当主の書斎「御居間」はわずから畳ほどの広さです。「質素儉約を旨に、世のため人のためを信条とした佇まいですね」。邸宅を囲む窓には明治時代の板ガラスがはめられ、外の景色がやわらかく歪みます。また、随所で見られるのが「無双窓」。これは二層扉の片側をスライドして風を通す建具で、自然と同居した生活ぶりを垣間見るようです。「心豊かな暮らしのヒントを見つけていただけなら」と当主の万紀子さん。この建物は現在も本間家が所有管理し、公開しています。

酒田三十六人衆が 軒を運んだ酒田の中心地

同じ本町通りにある「旧鑑屋」も、酒田を代表する廻船問屋です。かつて町政を司った豪商たちによ

る「酒田三十六人衆」の筆頭格で、その繁栄ぶりは井原西鶴の『日本永代蔵』にも描かれました。現在の建物は、弘化2年の「甘鯛火事」で焼失した後に再建されたものです。「酒田の典型的な商家の造りです。杉皮を敷いて玉石をのせた『石置杉皮葺』。町にはこの屋根が軒を連ねていました」と小山さん。「ここは迫力のある土間が見もの。酒田の家屋は入り口側に屋敷、裏口側に庭や畑や土蔵をつくり、通り抜けられる土間を設えた『町家造り』なんです。当時、三十六人衆以外の庶民は、家の間口（幅）で税金が課せられたようですから、間口が狭くて奥行きが深い京都の町家と同じ敷地割が多かったようです」。

住居と商店とが一体となった町家の建築。現在もその佇まいを守り続けている商店があります。

特集 | Special Edition

都 二 探 訪 庄 内 建 物



石置杉皮葺屋根



2つの傾斜面からなる切妻屋根で、間口は7間半。

旧 鑑 屋

現在の屋敷は、平成2年から8年間かけて保存修復作業を行ったもので、平成10年に一般公開を再開。国指定史跡。4/3まで庄内ひな街道特別展「阿部テイ子と紙人形展」を開催中。
 休 年 末 年 始、3～11月は無休
 休 酒 田 市 中 町 1-14-20
 ☎ 0234-22-5001

本 間 家 旧 本 邸

明和5(1768)年建造。母家は桁行33.6m、梁間16.5mの棧瓦葺平屋書院造り。長屋門構えの武家造りと、薬医門を構えた商家造りの2つの様式からなる。昭和24年～51年には公民館として使われていた。
 休 年 末 年 始、展示替え日
 休 酒 田 市 二 番 町 12-13
 ☎ 0234-22-3562



杵の形をした「杵欄間」。上座敷の建具や造作に職人技が光る。



当主の書斎は、家運繁栄の言い伝えがある戌亥の方角にあたる。



本間家は士分を与えられていたため、「御勝手」には板張りが許された。



内部は通り庭(土間)に面して十間余の座敷、板の間が並ぶ。



薬医門に伏せかかる樹齢400年の「臥龍の松」。一方に幕府の役人や住職が出入りしていた「長屋門」がある。

特集 | Special Edition
都 二 内 庄
訪 探 物 建

か め ざき
料 亭 香 梅 咲

嘉永7年(後に安政と改元)創業。旧名を「芳香亭」といい、「香梅咲」の名は、第80代出雲国造家 千家尊福氏による命名で、明治期に改められた。8部屋からなり、大広間には100名を収容。 困不定休 酒田市日吉町1-3-16 ☎0234-23-3366

湊町、商人の町として栄えた酒田の建築を見る上で、もう一つ欠かせないのが花柳界の文化、料亭の存在です。「酒田甚句」にも歌われた今町(現在の日吉町付近)で江戸末期から続く「香梅咲」は、

「町の魅力は、その成り立ちと共に培われた歴史や文化にあります」と温井さん。酒田の時代を見つめてきた建築には、暮らしの中に生きている歴史が記されています。

建物から郷土史を見つめ
未来の町を展望する

五代目の池田ひろみさんが女将を継いでいます。「創業から残っているのは正面の門だけで、他は昭和12年の火災で焼失しました。以前の建物は写真も残っていませんが、西洋風の建築で、屋根に風見鶏をつけたハイカラな建物だったという記録があります」。昭和13年に新築した店内は、銘木が使われた和風建築で、最も特徴的なのが池のある中庭を囲んだ2棟になっていること。すべての部屋が庭に面し、あざやかな酒田の四季を感じさせてくれます。

薄れていくのは残念。我々はお客さんとの対面商売ですから、顔を合わせて会話をすると、その心持ちを大切にしています。 同じ町家でも船場町の「あらき米屋」は異なる趣を見せます。その違いを教えてくださいましたのは、東北公益文科大学教授で、酒田の中心市街地再生に取り組み温井亭さんです。温井さんはまち歩きによる町家の調査を続けています。「酒田の町家は平屋造が多いですが、こちらは奥側に2階があります。また『とおりのま』という土間に面して坪付きの庭があるので風と光がよく入り、家族だけの空間としてとても快適なんです」。

時代をつなぐ歴史的建築
生活、生業の文化と地域性



上方文化の影響か、間取りは関西風の「京間」。

人が住み、町ができる
生活空間としての「町家」

船主や豪商らの寄進によって建てられた寺社建築物が並ぶ寺町(現在の中町)で、荒物屋を営む「小野太右衛門商店」は、幕末に創業し、現在は十代目が家名を守っています。「明治27年の酒田地震も昭和51年の酒田大火からも運良く免れた建物なんです」。間口全面を使った広い店構えは江戸時代の建築。店先はホウキやカンジキ、縄などの並んだ「みせ」があり、左に「ちゅうもん」という突き出した部屋があるのが特徴です。「だんだんと酒田の文化や風情が

薄れていくのは残念。我々はお客さんとの対面商売ですから、顔を合わせて会話をすると、その心持ちを大切にしています。 同じ町家でも船場町の「あらき米屋」は異なる趣を見せます。その違いを教えてくださいましたのは、東北公益文科大学教授で、酒田の中心市街地再生に取り組み温井亭さんです。温井さんはまち歩きによる町家の調査を続けています。「酒田の町家は平屋造が多いですが、こちらは奥側に2階があります。また『とおりのま』という土間に面して坪付きの庭があるので風と光がよく入り、家族だけの空間としてとても快適なんです」。



荒木家は天保3年に米商として創業した老舗で、現店舗は大正3年に下内匠町の本家から分家した建物。「店の裏側は港に面して、直接荷を揚げていたようです。この船場町の辺りは酒田の古き良き名残を大切に暮らしている人がいます。伝え聞いて知ることは大事ですね」と社長の荒木照夫さん。 こうした酒田の町家は、昭和62年の千葉大学玉井研究室の調査で23棟が確認されましたが、現在残るのはわずか10棟。温井さんは「『都市は都市建築からできています』といえます。都市建築の基本は住宅です。かつて住宅は古今東西共通して、建築と中庭がセット

小野太右衛門商店

元禄年間に糸商「筑前屋」として創業。初代は出町に店を構え、後に下内匠町へ、現店舗は3軒目。竹を材料とした製品と荒物雑貨を扱う。お雛さまの時期には、見事な江戸時代の古今雛が飾られる。 困日曜日 酒田市中町2-1-29 ☎0234-22-0507

あらき米屋

6間半ある間口の左側を土間として、現在の店先はもとは座敷で、帳場が置かれていた。屋根が四方に傾斜する「寄棟造」は明治末に流行。2階は16畳以上ある1部屋、庭にはお稲荷様の社がある。 困日曜日 酒田市船場町1-5-33 ☎0234-22-0408



屋根付きの門は、杉の一枚板。玄関を入ると、前庭から奥の庭へと風が抜けていく造り。



庭にせり出すようにして設えた「竹の間」からの眺め



舟底天井が張られた「紅紫檀の間」



丙申堂の板の間。梁にトラス構造が見られる。



店舗部分から見通す「とおり」



4万個の石が置かれている杉皮葺石置屋根。



昭和10年にアールデコ調の様式で建てられた旧恵比寿屋ビル。



を建てるところが増えました。風間さんの丙申堂に行けば見られますよ」と教えてくれたのは、建築家で、東北公益文科大学大学院特任教授の高谷時彦さん。風間家は、江戸後期から現在の銀座通りで商いをしてきた鶴岡一の豪商で、「丙申堂」は明治29年に住まい兼店舗として、庄内藩家老屋敷跡に建てられました。高谷さんが話すトラス構造は約60畳の板の間の梁に見られます。「当時、耐震のためにこの構造をというお触れは全国にあつたんですが、大きな建物がメインで、他の地域はあまり真面目にしなかつたんです。でも庄

内は小さな建物も含めて熱心に取り入れている。真面目な土地柄を表していると思いますね。」銀座通りにある「旧恵比寿屋ビル」も時代性や地域性を表していると高谷さんは話します。この建物は、江戸末期からこの地で商いをしてきた小池家が昭和10年に建てた鉄筋コンクリートビルです。「昭和初期に庶民から支持を得たアールデコ様式で建てられています。それと今は取り壊されましたが、ビルの奥に大きな和館があつたんです。和と洋の組み合わせは昭和初期の上流家庭の住み方で、鶴岡には他にも残っています。こ



旧西田川郡役所2階の吊り階段



旧西田川郡役所



明治17年築の旧鶴岡警察署庁舎。現在は解体修理工事中で平成29年秋に完成予定。

城下町の面影に溶けこむ さまざまな時代の建物

「鶴岡は城下町ですが、いわゆる武家屋敷が並ぶような町ではなく、いろいろな時代のさまざまな建物がある町ですね」と話すのは、市内の歴史的建築物で朗読を愉しむ会を開催している國井美保さん。それを象徴するように、鶴ヶ岡城跡にある鶴岡公園の周辺には、藩校致道館をはじめ白亜の洋館や現代建築など、さまざまな建物が景観に溶けこんでいます。

明治の名匠 高橋兼吉の洋風建築

なかでも目を引くのが、致道博物館にある「旧西田川郡役所」と「旧鶴岡警察署庁舎」です。学芸員の菅原義勝さんは話します。「この二つの建物はもともと馬場町に建てられて、後にここへ移築されたものです。明治のはじめは同じ通りに東北一と称せられた朝陽学校も建っていたので、鶴岡の人たちは本当に驚いたと思いますね。」明治初期、戊辰戦争で降伏した旧庄内藩。初代県令に就任した三島通庸は、封建社会が色濃く残る

鶴岡を一新しようと、洋風建築の建造にも力を入れました。そこで起用されたのが、横浜で洋風建築を学び、帰郷して杜寺などの施工をしていた高橋兼吉です。命を受けた兼吉は明治14年、ルネサンス風様式を取り入れた西田川郡役所を建築。3年後には、擬洋風建築の到達点と称される鶴岡警察署庁舎を建てました。和と洋が巧みに融合した兼吉の洋風建築は、擬洋風建築の中でも一線を画すものとして今も高く評価されています。

地域性、時代性を 映す、建物の数々

「庄内は明治27年に酒田地震があつて、西洋建築のトラス構造で家

〈致道博物館〉 旧西田川郡役所・ 旧鶴岡警察署庁舎

旧鶴岡警察署庁舎の博物館移築は昭和32年。旧西田川郡役所は昭和47年。どちらも保存を強く望む市民の力で実現した。重要文化財。現在、旧郡役所は歴史展示室として保存活用している。
☎12/28～1/4、12月～2月水曜日
☎鶴岡市家中新町10-18
☎0235-22-1199

旧恵比寿屋ビル

かつてエビスヤ薬局は、「守田寶丹」を扱う東北一の薬局で、保険事業や本など何でも扱う大店だった。数年前に閉店してからは建物を鶴岡飲料株式会社が管理。現在は有志によるエビスヤプロジェクトと高谷研究室が連携し、さまざまな再活用計画を進めている。
☎鶴岡市本町

風間家旧本邸 丙申堂

石置屋根の杉皮を含め、建築材の多くは所有山から。戦後は建物の保存活用を模索し、平成12年に一般公開開始。3/1～3/31は「鶴岡雑物語」開催。
☎12/1～4/9、7/13
☎鶴岡市馬場町1-17
☎0235-22-0015

特集 | Special Edition 都 二 庄 建 物 探 訪



特集 | Special Edition

都内二 庄内三 建物探訪

割烹三浦屋

現在は休業中だが、毎週日曜日はお座敷で「長唄糸の会」が三味線と長唄のお稽古をしている。
 〓 鶴岡市本町二丁目
 ※ 桜倶楽部では市民とふれあう活動の一環として、三浦屋の見学を年に一度実施中。詳しくは ☎0235-24-0099 (事務局・秋野建築設計事務所内) までお問い合わせください。



その時代その時代を 今に伝える木造建築の数々

もいえる建物。施主が4人の棟梁を東京新橋などの料亭に連れて行き、時代先端の技を学ばせ、腕を競わせて作った館内は、鶴岡料亭文化と大工職人たちの高度な技の結晶です。桜倶楽部ではそんな建物を保存していきたいと、平成7年から調査を開始。平成25年からは公募制で見学会を開催しています。

歴史や伝統と新しさを積み重ねる町
 東京に設計事務所を持つ高谷さんは話します。「統計的に調べたわけではありませんが、庄内の大

工文化はレベルが高いと思います。明治期のトラス構造にすぐ対応できたのも職人の木造建築に対する理解度が高かったからで、今も昔ながらの手刻み技術を持つ大工が多くいます。しかもそれが特別なことだと思っていないんですよ。國井さんは鶴岡の人々のそうした気質が、古い建物や伝統を残す地域性になっていると話します。「その一方で新しいものを積極的に取り入れる感性もあるから、鶴岡は両方が共存する町なんです」。時代時代を取り入れて、重ね着をしていく町。100年後はどんな景色が広がっているのでしょうか。

うした時代の象徴ともいえる建物は、ぜひ保存していきたいですね」
鶴岡のもてなし文化を伝える宿や料亭
 かつて大店の呉服屋がたち並び、一日市町と呼ばれた通りには、明治40年頃築の姿をそのままに残す「旧鶴岡ホテル」があります。戦前は原敬など大物政治家が投宿し、戦後すぐは進駐軍が食事と酒を楽しみ、昭和から平成にかけては杉村春子や宇野重吉など俳優や文化人に最頂にされた宿でした。しかし昨年3月、110年ほどの歴史が刻まれてきた鶴岡ホテルは、惜しまれながらも閉館。歴史的なまち

づくりについて話し合う鶴岡市の住民ワークショップでも、市民から大きな関心が寄せられるなど保存活用に向けた声が高まっています。数少ない現役料亭として、鶴岡のもてなし文化を伝えるのは、上肴町の「新茶屋」です。創業は江戸末期、肴屋だった店主がお店の後ろにあった庄内藩家老の下屋敷と庭園を取得して始めました。「だからお庭自体は、江戸時代の古くからあったんだと思いますよ」と語るのは、十代目店主の渡部政一さん。現在の建物は明治39年築で、135畳の大広間に大きな縁側が設けられるなど、庭園の眺めを第一に造られています。



原敬や杉村春子が泊まった「牡丹の間」



明治末期の姿をそのまま残す旧鶴岡ホテル

「一時期、この建物を壊す話もあったのですが、今となっては残して本当によかったと思いますね」と渡部さん。移りゆく庭園の四季の風情と鶴岡の郷土料理を愛する人々が、今も変わらず新茶屋に集います。

地元建築士有志の会「桜倶楽部」の秋野公子さんと井上孝紀さんが、「優れた発想とそれを実現した技術、加えて貴重な銘木の数々で、建築としては別格です」と話すのは、20年ほど前に休業した「割烹三浦屋」です。出羽三山詣での旅籠通りとして発展した七日町は、大正から戦前にかけて料亭文化が開花しました。昭和13年築の三浦屋はまさにその完成形と



庭園から新茶屋を眺める。



男性用トイレに贅を尽くすのは料亭のセオリーだった。

旧鶴岡ホテル

もとは明治にこの地で創業した呉服屋。問屋を宿泊させるうちに旅館業へと転業した。趣の異なる各室や和洋折衷の浴室、洋風食堂など、時代の面影が数々残る。庭の藤の花が見事なことから「藤の宿」としても親しまれてきた。平成26年3月閉館。
 〓 鶴岡市本町
 ☎0235-22-0521

新茶屋

明治の書聖・副島種臣などさまざまな文人墨客が訪れた鶴岡の老舗料亭。470坪の庭園は樹齢数百年を経た老松を中心に形づくられている。名物料理は卵焼き。毎年2月中旬から3月は巨大な雛壇が飾られる。雛弁当は要予約。
 〓 不定休
 〓 鶴岡市本町3-11-39
 ☎0235-22-0521



(左)3階の通り側にある洋室「親月荘」。(中)2階「田舎の間」の坪庭。各室に異なる意匠が施されている。(右上)屋外を思わせる青色の漆喰天井。(右下)優雅な楼閣をみせる割烹三浦屋。



庄内写真季行 22 酒田市平田地区

棚田の景観に映る
一瞬の自然現象と
感動との出会いを求めて

春の日の雨上がり、平田地区の小林集落の奥にある棚田に向かった。何度となく訪れては眺めている風景だが、この日はみるみる山肌には霧がかかった。山肌の傾斜地にある棚田は、里山の象徴であり、環境保全にも一役買っ

きた農地である。しかし最近、生産効率の悪さや農業者の高齢化による後継者不足などで耕作放棄地となり、急速に姿を消している。私はこの景観をいつまでも写真に残したい。ひたすらそう願ひ、ここに通いつけている。



鶴岡木村屋の かわらチョコ

発酵の力がつくりだす
やさしくて深みのあるチョコレートは
女性の可愛らしさと健康を願う
城下町鶴岡の新しい「ご縁起みやげ」

春待つ心がウズウズしはじめるこの季節、なんとも乙女心をくすぐるチョコが登場した。鶴岡の瓦人形をモチーフにした「かわらチョコ」だ。

これは、庄内の魅力を打ち出すチョコレートの開発販売に、10年ほど前から取り組んできた鶴岡木村屋による第二弾。今回は庄内の日本酒文化との融合だ。きっかけは、製品開発に取り組む吉野薫さんが、大山の酒蔵「渡會本店」の貴醸酒と出会ったことだった。貴醸酒とは水の代わりに酒で仕込む日本酒のこと。とろみのある甘口の熟成酒だ。「これはチョコレートに合う」と直感した吉野さんは、日本を代表するシヨクラティエ川口行彦氏の指導のもと、製品開発に乗り出した。

瓦人形との接点は、製品が完成し、販売戦略を立てる段階で、協力を依頼した小倉ヒラク氏のひらめきだった。小倉氏は東京を中心に活躍するアートディレクターで発酵研究家。「チョコレートも発酵食品」との縁で鶴岡とつながった小倉氏は、昨年10月、初めて鶴岡を訪れて致道博物館などを見学。そこで瓦人形に着目した。

瓦人形とは、江戸中期から鶴岡で作られ、親しまれてきた郷土玩具。北前船で運ばれてきた伏見人形を真似て、庄内藩の瓦師・尾形喜惣治が庶民向けに田んぼの土で作ったのが始まりだ。小倉氏はこの瓦人形を「京文化と東北文化が融合した鶴岡をまさに象徴するもの」と捉え、デザインをディレクション。粋でめんこいお姿となった。

一口かめば、糀の香りと甘さがふわりと広がり、まるやかに溶けていく。庄内の日本酒文化と民芸文化が合体した、贅沢な郷土菓子の誕生だ。

かわらチョコは、渡會本店の貴醸酒と、羽黒町の酒蔵「竹の露」の吟醸酒粕をブレンド。パッケージのイラストとデザインは東京在住のイラストレーター、ますこえりさんが手掛けた。鶴岡の瓦人形は市内に住む尾形一族で受け継がれ、現在は6代目の尾形弘一さんが継承している。取り扱い店は鶴岡木村屋のHPを確認を。

つるおか菓子処 木村屋 ☎0120-368-222



雪解けの 八森自然公園を 歩く

庭先の根雪がとけ、土が地面に顔を出す、心の底からほっとした気持ちになるのは雪国育ちであるからだろうか。土の匂い、感触そして空気感。それが「風」と「土」からなるその地域特有の「風土」そのものなのかもしれない。



黄連の群生

春先になると、毎年きまって訪れたくなる場所がある。酒田州市条にある「八森自然公園」だ。広い敷地には散歩道が敷かれ、四季豊かな自然の植生にふれることができる。

佐保姫の眠りを覚ます里歩き―あべ小萩
バンガローの近くに車を止めて、林床



菊咲一華と菫の薹

黄連の絨毯空に飛びたがる ―あべ小萩

散歩道を進むと、あちらこちらに露の薹と菊咲一華が、まるで長い眠りから目覚め、夢の続きをささやきあうように咲いている。雪の下でじっと自らの命を育み、雪解けと共に芽を出す律儀な姿に心を打たれる。今はまだ冷たい雨の下で花を閉じているが、春光を浴びると可憐な花を咲かせる姿が何とも愛おしい。

そつとしておきたき固さ落薹

―小宮山勇

足元の湿った枯葉の中に、鮮やかな紫色が目飛び込んだ。狸々袴である。名の由来は、空想状の生き物「狸々」の頭の赤い毛を花に見立て、下に広がる葉を袴に見立てたものだという。場所や時期



狸々袴

へと続く道を歩く。テントサイトのあるキャンプ場を過ぎると、辺り一面に黄連の絨毯が広がる。春先のほの暗い林床に、一時だけ一筋の光が差し込むのを見た。まるで一面に広がる花の星を空へ飛び立たせようと誘うようである。今にも星の絨毯が飛び立ちそうで、息をとめてその場に佇んだ。

によって、薄桃色や赤色など花の色が微妙に違う。私はここに咲く狸々袴の紫が特に好きだ。

そんな春の息吹はそここで見られ、公園の中央にある展望台からは、残雪の鳥海山を望むことができる。この雪嶺が一年の暮らしを支える水の源なのだ、感謝の想いを新たにしたい。

帰り道、仏の光背のような暗紫褐色の苞につつまれて咲く、座禅草に出会った。名前のごとく、法衣をまとい洞窟で座禅を組む姿に似ている。その姿に、私まで背筋が伸びる思いがした。

春泥をこゑごゑ撥ねてゆきにけり

―水内慶太

冬から春へ。そして初夏を迎えるまで、ここには次々といろいろな花が咲き、訪れる人を楽しませる。花追い人の如く、季節の移ろいにまかせてこの花たちに会いに訪れるのもいいだろう。そのたびに「風」と「土」の匂いが変わっていくのを感じる。それはあらためて自分と向き合う時間となるに違いない。



鳥海山



座禅草

◆八森自然公園 酒田州市条字八森921

写真文||あべ小萩「月刊俳誌」月の匣「同人、俳人協会会員」